

大津 歴博 だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

contents

企画展

れきはくの大津絵

P1~P3

コラム

江戸時代の鑑札を見る

P4~P5

収蔵品紹介

大津絵又平人形 昭和時代 本館蔵

P6

2025

No.

139



大津市歴史博物館

令和7年8月19日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

企画展 れきはくの大津絵

会期:令和7年9月27日(土)~11月9日(日)



【写真1】

鬼念仏藤娘図 温山良隠筆

江戸時代 本館蔵



【写真4】

大津絵人形 鬼念仏 永楽屋製

大正時代 本館蔵



【写真2】

大津絵 鬼念仏 江戸時代 本館蔵



【写真3】

大津絵 外法の梯子剃り 土佐権次筆

江戸時代 本館蔵



【写真5】

日本万歳 百戦百笑 小林清親画

明治時代 本館蔵

当館の大津絵コレクションが一堂に

当館は今年、開館35周年を迎えますが、一貫して収集に努めてきた分野のひとつが「大津絵」です。

開館当初、15件の館藏品から始まった大津絵コレクションでしたが、現在は、館蔵・寄託を合わせ128件(江戸時代の大津絵は78件)になりました。また、収集活動と並行して、定期的に企画展を開催するとともに、常設展示やミニ企画展の「蔵出し展」で紹介してきました。

当館の大津絵コレクションの根幹は、江戸時代に街道の土産物として販売されていた大津絵です。無名の職人による筆技の妙や、^{むく}無垢で^{ひょういつ}飄逸な味わいが発揮された大津絵は、大正時代に^{やなぎむねよし}柳宗悦が^{みんげい}提唱した民藝運動における価値観とも合致し、柳の精力的な著作や講演活動によって、現在の大津絵に対する見方が出来あがったと言っても過言ではありません。

一方、当館の大津絵収集活動でも明らかになってきたことですが、ひとくちに江戸時代の大津絵といっても、様々なものが存在することです。描き手の違いはもちろん、時期による需要(買い手)の変化によって、サイズや画題の盛衰、描かれ方など多様な実態を示す作例や、柳の価値観から外れた江戸時代後期・幕末の大津絵にも当館は目を向けてきました。

ちなみに、大津絵は江戸時代から歌舞伎や浮世絵、菓子の意匠など、さまざまな媒体でも利用されてきました。本年秋の企画展「れきはくの大津絵」では、江戸時代の大津絵を中心に据えつつ、画家や文人が描いた絵変り大津絵をはじめ、浮世絵や玩具類など、大津絵のこうした広がりや、信仰や芸能との関わりや、近代大津の産業振興などの視点も加えて紹介いたします。

鬼念仏百態一時代も背景も様々

前述のように、本展では、当館が収蔵するほぼ全ての大津絵関係作品・資料を展示します。出品件数は150件余り。展示品も多岐に渡り、様々な分野で大津絵が進出していることを示す構成となっています。

そこで本稿では、多様な大津絵を楽しむポイントのひとつを紹介いたします。それは、「鬼念仏に注目する!」です。17世紀末頃から近現代に至るまで、鬼念仏は手を変え品を変え、様々な形で登場し続けている点で稀有な大津絵画題です。

ちなみに、本展の展示作品全てのジャンルに渡って鬼念仏をカウントすると、その数50余り。これは出品作品・資料のうち、どこかに紛れて登場している鬼念仏を含めたカウントですが、全出品件数のうち約3分の1に達する数字です。この例でもわかるように、鬼念仏を通覧することは、即ち、大津絵を概観することに通じます。というわけで、本展で注目すべき鬼念仏達を紹介します。

まず、最初に登場していただくのは、【写真6】の鬼です。



【写真6】
大津絵 鬼念仏 江戸時代 本館蔵

この鬼、宝永5年(1708)の『傾城反魂香』フランス国立図書館本に登場する鬼と同様に裾が膝丈しかない点で、館藏品中、最も古い鬼念仏と言えます。18世紀半ば頃に描かれた表紙の【写真2】の鬼と比べても、^{ほお}頬の^{ひげ}髭、^{あごひげ}顎鬚、胸毛、すね毛、果ては足指の毛に至るまで伸び放題で毛深い姿で描かれています。これは、鬼念仏のモデルが、寺を破門となって追い出され、寺に所属できずに放浪する、素行の悪い無頼僧・破戒僧であることと関係しています。髪も髭も伸び放題の姿は、それを象徴しています。

もっとも、江戸時代も18世紀の中盤に入るにつれて、市中取締りも強化され、世の中が安定してくると、大津絵師たちも鬼念仏の路線を変更します。無頼僧のリアルな見立てとして鬼を表現するよりも、可愛らしくアレンジした鬼のほうが売れ行きも好調だと気付いたのでしょう。その結果、鬼念仏も【写真2】のような、より図案的でアクのない造形、そしてつぶらな瞳の人懐っこい姿となります。この様な作風は、画人が描く絵変わり大津絵にも影響を与えます。画僧の温山良隠おんざんりょういん(1752~1797)が手掛けた【写真1】は、その傾向が顕著です。藤娘と一緒に遠出した鬼は、歩き疲れてギブアップした藤娘を気遣い、おんぶしてあげる頼もしさをも発揮しています。満面の鬼の笑顔は、ほとんど猫顔に描かれており、鬼であることを忘れてしまいます。鬼にまつわるイメージとのギャップがこの作品の肝です。

ちなみに、このテーマは象牙彫刻でも表現されていて、温山の作品とは真逆に、地獄の獄卒さながらの外見で鬼が表現されています【写真7】。しかし、よく見ると、おんぶした藤娘に向ける鬼の表情は何やら嬉しそうです。気さくに藤娘に話しかけている感すら伝わってきます。この象牙彫刻は19世紀前半の作と思われますが、いかにも情け容赦のない風貌の鬼が、優しさと頼りがいをみせている、温山の作品よりもさらにギャップ感を求めた愛好家が発注した作品といえそうです。大津絵では、時代やテーマによって鬼の扱いが随分と変化を続けていることに気が付きます。

時代に即した応用例としては、近代における政治風刺画としての鬼念仏があります【写真5】。これは、日露戦争で海戦も陸戦も連戦連敗のロシアを揶揄する見立てなのですが、まず、鬼の身なりは墨染の法衣に代えてロシア正教神父風で帝政ロシアを表現しています。その赤毛の頭髮からは折れた砲身が突き出て、まさに鬼念仏の角です。背中には、やつれた番傘代わりに被弾した魚雷や砲弾の修理で継ぎはぎだらけの軍艦が、首から下げるのは鉦かねにあらず、軍費が尽きて空の財布です。鬼の撞木つづもくに見立てた折れたサーベルを十字架代わりに手にして赦しを乞い、奉賀帳ほうがちょうと思いきや白旗を下げて降参という姿です。日本人の戦勝気分をくすぐり、溜飲を下げさせる政治風刺画としては凝った出来栄えと言えるでしょう。元来、新聞錦絵でも実績のあった小林清親きよちか(1847~1915)ですが、鬼念仏のアイテムを活かし尽くした風刺ぶりは見事なものです。

同時に、当時、大多数の日本人の関心が集中する時事問題に鬼念仏の見立てを用いたわけですが、それでも世間は理解するだろうと版元も作者も判断したところに、時代を超えてもお高い鬼念仏への認知度を知ることができます。



【写真7】
鬼念仏藤娘象牙置物 江戸時代 本館蔵

以上のように、怪異な鬼の姿や存在を、親しみやすく見立てることや、滑稽な風刺を加えることについては、大津絵は巧みです。鬼念仏に注目して彼らを比較すると、平成の鬼念仏に至るまで300年弱の長きにわたる表現や扱いの変遷かいいざやく、諧謔や風刺の幅を楽しむことが出来るので、おススメの鑑賞方法です。

長い大津絵全体の歴史のなかでも当然、流行り廃れがあり、新たに創作される画題もあれば、廃版の運命をたどる画題も多かったのですが、鬼念仏は、草創された元禄期頃以降、いつの時代も愛好する文化人・絵師などが絶えず存在し、常に更新され、現在に至るまでキャラクターとしての命脈を保ってきました。本展では、新旧の鬼念仏を初め、大勢の大津絵がお迎えます。

(学芸員 横谷賢一郎)

江戸時代の鑑札かんさつを見る

鑑札と株仲間

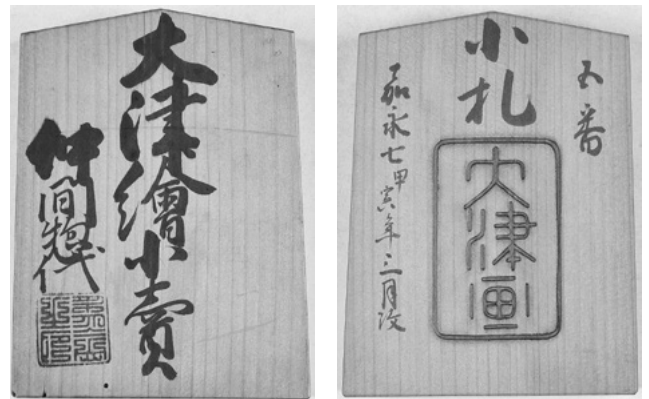
当館常設展示(2階)には、江戸時代の天津町の特産や商業について紹介するコーナーがあります。その一角に、将棋の駒のような形をした「鑑札」という木札をずらりと並べています。鑑札は、あまり聞きなれないものかもしれませんが、「特定の営業または行為を公認したしるしに公的機関や同業組合などから出される証票」(『日本国語大辞典』)です。つまり営業許可証と思っていいでしょう。

現在、当館には40点ほどの鑑札が収蔵されています。これら鑑札は、商業の営業許可ということで、江戸時代の「株仲間」との関係抜きに語ることはできません。江戸時代初期、職人や商人の同業者組合「株仲間」が結成されました。これは、江戸幕府が全国の商品流通を統制するために、各種の「仲間」に営業上の専売・専業の特権である株(権利)を与えたものでした。その代わりに、各株仲間は江戸幕府に運上や冥加みょうがという営業税を上納することになったのです。

こうした中で、江戸幕府が公認した株仲間内に所属することを証明するものとして商人に下付された木札が鑑札でした。鑑札を下された者のみにその商売が許されて、それ以外の非公認の仲間ではない者や新規の商人は商売することができなかったといわれています。

鑑札を見る①～「天津絵小売」～

それでは、当館収蔵のうちいくつかの鑑札を紹介していきましょう。まず「天津絵小売」【写真1】の鑑札です。表には「天津絵小売」「仲間惣代」、裏には「五番」「小札」「嘉永七甲寅年三月改」と墨書されています。また、特に目を引くのは裏面の「天津画」という焼印でしょう。これらの情報を総合すると、江戸時代の天津町では、天津絵の小売りを営む株仲間がいて、少なくとも5軒はあったことが推測されます。天津を代表する郷土の特産としての「天津絵」は、もっぱら描かれた画題などが注目されてきましたが、ユニークなキャラクターが全国に知れ渡るその裏側で、こうした天津絵を流通販売する商人の存在があったことを忘れてはならないでしょう。



【写真1】
「天津絵小売」鑑札(個人蔵)(左:表、右:裏)

鑑札を見る②～たきぎなかま薪仲間～

次に、もう一例を取り上げましょう【写真2】。この鑑札では、表に「薪問屋」、裏には「三拾七番」「薪株(焼印)」
「嘉永七寅改」と見えます。ここから、嘉永7年(1854)の天津町で「薪問屋」、すなわち薪を取り扱う仲間(薪仲間)がいたことがわかります。薪は燃料などの日常生活必需品として消費されていました。

天津町の薪仲間は、享保19年(1734)に京都町奉行(当時天津町は京都町奉行の支配となっていました)から認可され、その御礼として年始と八朔はっさく(旧暦の8月1日)には銭百疋ひきを献上しました。また、寛政3年(1791)の時点で薪仲間は112軒あったといわれています。この後、嘉永7年に至るまで仲間数がどのように変動したかは不明ですが、この鑑札の所持者は「三拾七番」目の薪仲間だったといえるでしょう。



【写真2】
薪問屋の鑑札(個人蔵)(左:表、右:裏)

鑑札の年号に注目すると

江戸時代は株仲間によって独占的な価格設定のもと商売が行われていましたが、天保年間(1830~1844)になると江戸幕府が株仲間解散令を出します。大飢饉(天保の飢饉)の発生などで物価が高騰し、その原因が株仲間にあると幕府が判断したためです。

しかし、嘉永4年(1851)、江戸で株仲間再興令が出され、大坂、京都に続き、大津町でも株仲間の再興が行われました。例えば、大津の上菓子屋仲間(京菓子の職人組合)の15軒は幕府に再興を出願し、認められています。一方、「大津絵小売」と「薪問屋」の鑑札の年号を改めて注目してみると、これらの鑑札には「嘉永七年甲寅年三月改」「嘉永七年改」と墨書されています。嘉永7年は株仲間再興令が出されて3年後のことですが、大津町の鑑札には嘉永7年の年号が書いているものが多くあります。これは嘉永7年に一斉に鑑札が出されたといえるのではないのでしょうか。

鑑札を見る③ ~通行許可証としての鑑札~

ところで、こうした鑑札は、株仲間の所属を証明するものだけではありません。ここで最後に、通行手形を兼ねた許可証としての鑑札(以下、通行鑑札)を紹介します【写真3】。

この通行鑑札の表には、「三大手二之丸」「御門出入札」「大津玉屋町藤屋仁兵衛」、裏には「向坂五右衛門」と「伊奈祐三郎」と押印があります。向坂と伊奈は、膳所藩の家臣であり、鑑札を下付された人(藤屋仁兵衛)が膳所城を通行し、商売(納品)するための許可証だったと考えられます。



【写真3】

御門出入札鑑札(個人蔵)(左:表、右:裏)

ここで注目したいのは、上部に空けられた穴です。この鑑札は、門を通る時に掲示したはずで、登城に際して持参していないと効果はありません。よって、この穴に紐を通し、携帯して使っていたと考えられます。

この鑑札をもって、膳所城でどのような商売(納品)をしていたかどうかはわかりません。しかしながら、株仲間の鑑札とは少し性格が異なるものの、鑑札のもつ歴史資料としての重要性がよくわかると思います。

株仲間の終わりと鑑札

明治5年(1872)2月、大津県(慶応4年に明治維新新政府によって設立された県)が自由な商売を認めたことにより、株仲間による独占的な商売体制は解体されました。これによって近代以降、鑑札は効力を失い、単なる木札となったといえるかもしれません。しかし、今でも残る大津(町)の鑑札は、東海道五十三次の宿場町の一つであった、江戸時代の活気あふれる商人らの活動に思いを巡らす一つの手がかりになるのではないのでしょうか。

当館所蔵のその他の鑑札(一部)



提灯屋仲間の鑑札(表)



傘仲間の鑑札(表)



左官(仲間)の鑑札(表)



上菓子屋仲間の鑑札(表)

(学芸員 奥芝理沙)

収 蔵 品 紹 介
 またべい
大津絵又平人形 昭和時代 本館蔵

今回は「れきはくの大津絵」展に出品する大津絵関係資料から、昭和10年代に制作された又平人形を紹介します。

この玩具は、大正9年(1920)に、大津市材木町の中村松次郎が創作したとされる人形です。ミシン^{のこ}鋸でカットした角材を組み合わせて形をつくり、泥絵具で彩色したもので、角ばった造形が特徴的です。長刀弁慶は弁慶の持ち物をシルエットで巧みにカットしていたり、鬼や鷹匠の袖には布を貼り付けて表現したりと、各所にこだわりを見せながらもシンプルで愛らしい造形に仕上げています。

昭和10年(1935)に作成された人形の由来書によれば、この玩具が考案された大正時代はミシン^び挽きの玩具は珍しく「当時では着想が奇抜なりしたためか過る年の商工展や巴里の万国工芸博に出品して何れも授賞に浴し、続いて日本郷土玩具集に揚げらるゝに及び^{いよいよ}愈々世間に認めらるゝに至り」とあるほか、昭和初期の郷土玩具集『日本郷土玩具 西の部』(武井武雄 昭和3年 地平社)にも、滋賀県の玩具として、項目を挙げて紹介されています。

博物館には、大津絵の画題である「長刀弁慶」、「鬼念仏」、「鷹匠」のほか、昭和の御大典にあわせて作られた、お田植人形(4体1組)などが収蔵されています。お田植人形は、昭和初期に野洲^{ゆきさいでん}の悠紀斎田で行なわれた、お田植祭にあわせて考案されたと思われるものですが、時代がくだるにしたがって、越後獅子、猿回し、武者将棋、早乙女、住吉踊など、大津絵以外のモチーフの人形も作られるようになったようです。

明治になると、国内の産業発展や輸出品目育成を目的

に行なわれた内国勸業博覧会などを通じて、地域の製品の育成や強化が国をあげておこなわれました。大津でも、市と関係団体が連携し、明治末頃から品評会や勸商場(物産の陳列・販売場)を設け、地元製品の振興につとめました。又平人形が内外の品評会に出品されたのも、こうした取り組みの上のことだと思われます。

滋賀県でも、明治21年(1888)に県庁敷地内に設けられた物産蒐集所^{しゅうしゅう}を端緒に、明治36年には現在の長等小学校の場所に移転し、滋賀県物産陳列所が竣工しました。同所では展示・即売だけでなく、商品の開発・指導も行っていました。当館に収蔵された資料に、出品者が陳列所に提出した郷土玩具の企画書があり、そのなかに丸竹を加工した大津絵人形の商品案(スケッチ)が残されています。同様の玩具は、前掲『日本郷土玩具 西の部』に、又平人形の作者・中村松次郎が大正14年に丸竹人形と称する玩具を創案したと記述があり、関連が想像できますが、図案のサイン(泣花)とは符合せず、関係は不明です。

最近では、大津絵は特別なもの=美術品というイメージでとらえることが多くなりましたが、日ごろから多くの大津絵に囲まれている大津の人々にとっては、今も江戸時代に街道で売られていた頃と同じお土産のイメージがあるように感じます。こうした近代の大津絵の関連資料は、現在まで大津絵を身近に守り伝えてきた、大津の歴史の一部だといえるでしょう。

(副館長 木津 勝)



又平人形(左から鷹匠、鬼念仏、長刀弁慶)
 昭和時代 本館蔵



大津絵竹細工置物図案(部分)
 大正~昭和時代 泣花作 本館蔵